

明治期和訳聖書における聖書用語

——「悪魔」と「鬼」——

加 藤 早 苗

キーワード：悪魔 鬼 仏教 漢訳 ヘボン訳

1 はじめに

『日本国語大辞典』⁽¹⁾によると「悪魔」及び「鬼」の語源は、

【悪魔】仏語。仏道修行を妨げる悪神。

【鬼】日本の「鬼」はモノ、シコなどと訓まれて、目にみえない悪しき靈やモノノケを意味していた。(以下略)

と解説されるように、本来は容姿を持たない見えない存在であったが、現在ではその獨特な姿形を容易に連想することができる。しかも、多数の図像作品において両者の容貌は重なることなく、それぞれが別個に特異な存在として認識されている。

「悪魔」「鬼」は日本において古くから使用されている言葉であるが、明治期に聖書を和訳する際にギリシャ語聖書「διαβολός (diabolos)」及び「δαιμονίον (daimonion)」の翻訳語として用いられたという経緯を有する。

明治期に行われたプロテスタント宣教師達による和訳聖書は、ヘボン訳「新約聖書馬可伝」「新約聖書約翰伝」「新約聖書馬太伝」を初めに、翻訳委員会訳による分冊聖書出版の後、1880年に一冊本『新約全書』(以下全書という)として完成する。聖書翻訳を宣教の第一としたヘボンら宣教師にとって用語の選択は重要事項であり、16世紀のイエズス会が使用した「大日・極楽・精進・息災」などの仏教用語を避け、「あらゆる階層の日本人の読者にすぐわかるような文体で、しかも格調高い神の靈に満ちた言葉で真理を伝えうるような日本語聖書の翻訳」を目指したと記されている。⁽²⁾

しかし、今回扱う「悪魔」は仏教用語であり、「鬼」も仏教的要素の強い在来語である。本稿では、明治期の聖書翻訳の背景となったキリスト教と仏教、更に中国と日本における語意の相違及び語意の変化に注目し、明治期聖書の和訳に使用された「悪魔」と「鬼」の採択経緯を明らかにする。

2 先行研究及び調査対象

尊田（2000）は「diabolos」と「daimonion」を2種類の「悪魔」と捉え、「daimonion」については「翻訳委員会訳ではdaimonionもakathartos pneumaも「悪鬼」とし、一つの訳語に統一している」と述べている。しかし、「daimonion」を「悪鬼」と訳語統一したのは大正改訳においてであり、翻訳委員会訳（分冊聖書及び全書）の段階ではマタイ伝、ヨハネ伝では26例中1例のみ「悪鬼」で25例は「鬼」と訳出されている。また「akathartos pneuma」についても19例中7例が「汚れたる鬼」で、大正改訳では「悪鬼」を退けてすべて「穢れし靈」に統一されている。従って、翻訳委員会訳による「訳語統一をしようとする意識が強かった結果である」との考察には疑問である。

調査対象として、明治期の聖書和訳にあたり底本とされたギリシャ原書、欽定訳、漢訳聖書から代表訳、BC訳、北京官話訳（以下北京訳という）、および代表訳、BC訳に影響を与えたモリソン訳を用いる。和訳聖書は『新約全書』とその前身である分冊聖書ならびにヘボン訳とする。なお、調査箇所は4福音書（マタイ伝、マルコ伝、ルカ伝、ヨハネ伝という）を中心とし、必要に応じて参考資料、辞書類を追加する。⁽³⁾

3 原典における「διαβολος (diabolos)」と「δαιμονιον (daimonion)」

まず、底本としたギリシャ原書での「διαβολος (diabolos)」及び「δαιμονιον (daimonion)」の語義から、キリスト教における「diabolos」と「daimonion」の概念を把握しておこう。

3-1 聖書における「διαβολος (diabolos)」－同意語「σατανας (satanas)」

「διαβολος (diabolos)」という言葉は70人訳ギリシャ語聖書においてヘブル語「šātān」に対して用いられた言葉である。ただし、ギリシャ語にも「サタン」に通じる「σατανας (satanas)」という言葉があり『新約ギリシャ語辞典』では以下のように解説している。⁽⁴⁾

【διαβολος】囮中傷する、悪口を言う、囮中傷（誹謗）者、ざん言（訴）者；特に
○～悪魔

【σαταν】不变、あるいは σατανας [前者はヘブル、後者はアラム、「反対者、敵」
の意]サタン、悪魔、(=διαβολος)

「サタン」はヘブル語やアラム語からの引用であり、語源は敵対者（satanas）、中傷者（diabolos）である。『キリスト教神学事典』⁽⁵⁾では「悪魔」をヘブライ語「satan」からの直訳であるとして

【悪魔】英語のDevilは、古英語のdeofel、ラテン語のdiabolus、ギリシャ語のdiabolosなどに由来し、これはまた「敵対者、反対者、反逆者」などを意味するヘブライ語satanの直訳である。キリスト教において悪魔は、サタン、ルシファー、まれにはベエルゼバブとかベリアルなどと呼ばれている。(以下略)

と解釈している。他の聖書辞典類においても「悪魔」と「サタン」は同意語として扱われ、『新聖書大辞典』では「悪魔」は「サタン」の項に委ねており、『聖書思想事典』も「悪魔」という見出し語は設けていない。反対に『キリスト教大事典』では「サタン」の項がなく「悪魔」の項で解説している。⁽⁷⁾

旧約聖書ではギリシャ語「diabolos」に対して欽定訳は「satan」、和訳は欽定訳を引き継いで「サタン」と音訳され、明治期和訳から現行の聖書に至るまで「悪魔」という言葉は用いられていない。しかし、新約聖書では「diabolos」は欽定訳で「devil」、和訳では「悪魔」、なお「satan」は旧約聖書同様「サタン」と訳され、どちらも同義語として神及びキリスト者に対する敵として描かれている。(新約聖書における「悪魔」と「サタン」の使い分けについては稿を改めて述べる。)

旧約聖書の時代において「悪魔」は神に従属する存在として聖書に登場する。

エホバ、サタンに言ひたまひけるは、彼を汝の手に任せす只かれの生命を害ふ勿れと

(全書ヨブ記2:6)

しかし、新約聖書の時代には神に敵対する存在へと変化する。

偕イエス聖靈に導れ悪魔に試られん為に野に往り (全書マタイ伝4:1)

その経緯について『聖書スタディ版』に次のような解説がある。⁽⁸⁾

捕囚としてバビロニアに住んでいたユダヤ人はB.C538年にペルシアがバビロニアを打ち破ったことで祖国への帰還を許可された。その後、約200年の間イスラエルの民はペルシアの文化、政治、宗教に大きく影響された。ペルシアの宗教によれば、神には最大の敵対者という存在があり、その邪悪な策略を実行するのを助ける天使のようなものを伴っているとされる。ヨブ記が書かれたのはペルシア時代、あるいは更に後の時代と考えられる。70人訳ギリシャ語聖書ではこの神の敵が「告発する者」を意味するディアボロス、すなわち悪魔と訳された。このころからイエスが誕生するまでの200年の間にサタンあるいは悪魔は神に敵対する悪の勢力として意識されるようになっていた。(以下略)

「悪魔」とは悪の起源の不可解さと神秘を説明するために生じた観念であり、その起源は古代ペルシャ宗教の神話論的二元論にあるとされる。ユダヤ教では神に敵対する存在をいつも「サタン」という名称で呼んでいたのではなく、「be'liyya'al (無益)」

「maštēmāh（敵意）」という呼び方が一般的であり、他にも多くの呼称があった。後期ユダヤ教から原始キリスト教時代にかけて善惡の二元論的対立の影響を受け、律法学者等は人間の犯す全ての罪の根を「悪しき衝動」の中に見出し、この衝動とサタンと死の使いを1つのものであると考えた。⁽⁹⁾ 新約聖書で用いられている「悪魔」「誘惑者」「敵対者」などという語は後期ユダヤ教のサタン像を引き継いだものであり、「訴える」という動詞から造られた語「diabolos」は、旧約聖書において「サタン」、新約聖書では「悪魔」と訳され、キリスト教においては神の支配下から離れ、神に敵対する人格的存在として認識されている。

3-2 聖書における「δαιμονιον (daimonion)」－同意語「δαιμον (daimon)」

新約聖書においてギリシャ語「δαιμονιον (daimonion)」は欽定訳では「diabolos」と同じく「devil」と英訳されたが、American Standard Version以降は「demon」と改訳された。和訳においても全書「鬼・悪鬼」から大正訳「悪鬼」、口語訳「悪靈」へと改訳が行われた言葉である。古代ギリシャ語を対象とした『ギリシャ語辞典』では「δαιμονιον (daimonion)」及び「δαιμων (daimon)」を次のように解説する。③の「悪靈」は1954年の口語訳以降を指す。

【δαιμονιον】①神的なもの。神的な力。神靈。②神（θεος のように人態的に觀ぜられず、神殿なども持たないもので、その意味では θεος より下位の神的存在と言ってもよい）③〈聖〉悪靈。

【δαιμων】①神（Hom. では θεος と全く同じように、たとえば Αψροδιτη といった具体的な神を指して用いられることが多い）；（固有の名称を持った個々の神ではなく）神性を具えたものとしての神=δαιμονιον。②神的な力・働き、神性、神威；その働きとしての運命（幸運にも不運にも）。③個人の運命を司る守護神、神靈；死者の靈、怨靈。④〈聖〉悪靈

「daimonion」及び「daimon」のギリシャ語の語源は「神的なもの」であり、神々および神的諸力の名称であった。『新約ギリシャ語辞典』⁽⁵⁾を確認すると

【δαιμονιον】①神、神々 ②（神と人との中間的存在、人に憑いてその心を支配し、また病氣殊に精神病を起させるものと信ぜられていた）デーモン、鬼神、惡鬼（靈）

【δαιμων】（= δαιμονιον）デーモン、惡鬼（靈）

のように、本来の語義では神、神的なものであるが、聖書では疾病や精神的苦痛などを与える存在として捉えられている。旧約聖書の用例を示すと次のようである。

かくてエホバの靈サウルをはなれエホバより来る悪鬼これを惱せり

(全書サムエル記上16:14)

「悪鬼」は神の支配下にあり、神の許しを得て人に害を及ぼす靈であることが確認できる。⁽¹¹⁾

ギリシャ・ヘレニズム時代の民間信仰ではデーモンは超自然現象を起す死者の靈とも考えられており、神とデーモンに明瞭な区別はなかった。旧約の時代にも人々の間には悪靈が荒野や廃墟に住み着いているという民間信仰や、異教の神々の残存、不吉な力の支配者などという観念や風習が浸透していた。本来、悪靈信仰はキリスト教信仰とは相容れないものであり、恐れや忌まわしい靈的な力は唯一神に吸収され、旧約聖書ではデーモンは神と同等な地位から神に仕える存在に変化した。更に、後期ユダヤ教になると旧約で用いられた「rūah rāāh」（悪しき靈）などの語の他に「害毒を流すこと・破滅をもたらすもの・人を苦しめる厄病神」などの言葉がデーモンの名称に加わり、人に害を与える働きがデーモンの概念に加算され、神的存在から神の意志と対立する存在、神の支配に還元されないものとなった。⁽¹²⁾

新約聖書においてデーモンの用語は後期ユダヤ教と同義に用いられ、大部分は人に取り付く悪靈として登場する。

パリサイの人きゝて曰けるは　この　おに　かしら　つか　あら
いひだす　遂出ことなし　（全書マタイ伝12:24）

上記用例を見ると、旧約聖書とは異なり「鬼」は神の支配から離れ悪魔の支配に下っている。なお、新約聖書ではマタイ伝に「daimon」の用例は1例存するのみで、他は「daimonion」の語が用いられている。これは神と人間との神的媒介を暗示する「デーモン」という言葉を避けたためである。

「diabolos」（悪魔）が神に敵対する人格的存在であるのに対して「daimonion」（鬼・悪鬼）は「evil spirit」「unclean spirit」（汚れた靈）などと表現されるように人間を苦しめる靈であり、新約聖書では人に肉体的、精神的疾患をもたらす悪魔の手下的存在として把握されている。

4 仏教における「悪魔」「鬼」

仏典にも「悪魔」及び「鬼」が登場するが、キリスト教における「悪魔」「鬼」の概念とは異なるものである。違いについて確認しておこう。

4-1 「悪魔」

現存する聖典のなかで最も古く、釈尊の言葉に最も近い詩句を集めたといわれる

『スッタニパート』の中に以下のような釈尊と悪魔の会話がみられる。⁽¹³⁾

426 (悪魔) ナムチはいたわりのことばを発しつつ近づいてきて、言った、「あなたは瘦せていて、顔色も悪い。あなたの死が近づいた。」

428 あなたがヴェーダ学生としての清らかな行いをなし、聖火に供物をささげてこそ、多くの功德を積むことができる。(苦行に) つとめはげんだところで、何になろうか。

429 つとめはげむ道は、行きがたく、行いがたく、達しがたい。」この詩を唱えて、悪魔は目ざめた人(ブッダ)の側に立っていた。

ここに悪魔は釈尊を「誘惑する者」として登場する。「ナムチ」について原始仏教聖典では一般に「魔」(Māra)と漢訳されているが、もともと中国では「Māra」という概念をはっきり捉えておらず音写して「魔」という漢字を充てたのである。ナムチとはインド神話に登場する最高神インドラを策略にかけた裏切り者で、最後にはインドラ神に首を落とされる悪魔の名である。『スッタニパート』の訳者中村(1988)は、悪しき者を意味するナムチが死神マーラと同一視されることについて

死神はときには〈滅亡をもたらす者〉とも呼ばれ、またウパニシャッドにおけると同様に〈死〉と呼ばれることがある。これらはみな同義語である。死神バラモンの青年ナチケータスを誘惑して真剣な求道をそらせようとする話は『カータカ・ウパニシャッド』に出ている。仏典の右の一連の詩句はこれを直接または間接に受けて、死神についても仏教以前の古い呼称を継承するとともに、新たにマーラ(殺す者)という呼称を用い、これが後世の仏典では特に有力になったのである。

と述べている。⁽¹⁴⁾「悪魔」については「悪魔相応」と呼ばれる經典に25の説話を書かれており、後に集成編成された漢訳四阿含の雜阿含經第39卷にそのうちの22話が収められている。「雜阿含經」で用いられている漢語「惡魔波旬・魔波旬」に対して、中村(1987)は「惡魔・惡しき者」という言葉を使用し、「漢訳仏典では普通「波旬」と音写するが、この訳ではなるべく異様な印象は与えたくないでの、意味をとって訳すことにした。」⁽¹⁵⁾と注記に述べている。漢訳では他に「天魔・天魔波旬・魔」などの言葉が広く用いられ「魔」が細かく分類され、様々な呼び名を持つことがわかる。では、釈尊自身は「魔」をどのように解釈していたのであろうか、次のように答えている。⁽¹⁶⁾

3一面に坐して具寿羅陀は世尊に白して言へり一

魔、魔と説くは、大徳よ、如何なるをか魔と為すや。

4 羅陀よ、若し色あらば魔・殺者・死者あり。羅陀よ、故に此處に、色を魔なりと観じ、殺者なりと観じ、死者なりと観じ、病なりと観じ、塵なりと観じ、刺なり

と観じ、痛なりと観じ、痛種なりと観ぜよ。是の如く観ぜば正觀すと為す。

以下、受、想、行、識と続く。増谷（1970）は「色」は肉体的要素を指し、「受・想・行・識」は感覚、表象、意志、意識を表現する人間の精神的要素であると分析し、

ブッダにおいては、悪魔とは、けっして古代の人々が考えていたような、非人間的存在として、客觀の世界のなかで跳梁するがごときのものではなかったことを意味している。それは、かえって、人間の内なる悪しきもの、人間の肉体と精神のなかにすくっている「内なる妨害者」を意味していることが、このブッダの答えのなかにはっきりと見てとられるのである。

と述べている。⁽¹⁷⁾ また、『岩波仏教辞典』⁽¹⁸⁾「悪魔」の項では

キリスト教ではサタンを意味するが、仏教では仏道を妨げる悪神を意味する。また仏教では〈魔〉ともいわれる。māraは、殺す者という意味であるから、〈殺者〉〈奪命者〉と漢訳されることもある。（以下略）

と、仏道を妨げる悪神を指すと解説する。原始仏教「スッタニバーナ」を始め、「サンユッタ・ニカーヤ」で語られている悪魔は時には蛇に化け「誘惑する者」「脅迫する者」として修行を妨げることを目的として現われる。これは悟りを開いた仏陀にさえ悪魔の誘惑があり、絶えず戦い続けている姿を示し、悟りを開くことが完成ではないことを教えているのであり、悪魔のささやきにより生ずる内なる心の迷いや不安に対して仏陀のようにきっぱり否定し仏道に精進するよう勧めていると解釈するなら、増谷（1970）の考察のように仏教における「悪魔」は人の心に内在する煩悩や欲望の変化した姿であるといえる。

4-2 「鬼」

仏典を漢訳する際に何を仏教の「鬼」として訳したかについて「翻訳名義集」鬼神篇を確認すると、鄭玄や尸子の引用から儒教における鬼神觀「鬼は氣であり、帰である」を述べ、仏教における「鬼」については婆沙論の引用から「鬼は畏るべきもの、威あるもの」と解説している。⁽¹⁹⁾ 知切（1978）『鬼の研究』では仏典には獄鬼と煩悩の鬼の2種類の鬼が出てくると述べ、心内に巣喰う無形の鬼として、三品鬼、三種鬼、八部鬼衆、十鬼などを挙げ、悪魔についても同類と見做し、鬼の仲間に八魔、十魔を加えている。⁽²⁰⁾ これらは人の心を惑わし衆生が仏道に帰依するのを妨げるものではあるが、心内に存在する無形の鬼として一括りにするには抵抗がある。鬼形を有するものに十種ありとして語られる「楞嚴經」の十鬼は有形の鬼を前提としており、八部鬼衆の毘舍闍なども胎藏界曼荼羅に描かれたものをみると手に人の手足と劫波羅を持った餓鬼の風体で実体のあ

る存在として捉えられている。初期の經典「長阿含經卷第七 弊宿經」においても⁽²²⁾

但見前人爲鬼所食骸骨狼藉。婆羅門。彼赤眼黑面者是羅刹鬼也。

と、人を食する赤眼・黒面なる有形の「羅刹鬼」が確認できる。サンスクリット語から中国語に翻訳される時「畏るべきもの、威あるもの」として解釈された鬼であるが、多くの經典が成立していく過程で鬼は複雑で詳細な形容を帯びていったと思われる。『望月佛教辭典』では「鬼」の説明は次のように始まる。⁽²³⁾

恐るべき形相を有し、人を惱害する怪物を云ふ。佛教中、鬼神を説けるもの甚だ多く、又阿傍、羅刹、山精、雜魅等を総じて鬼又は鬼神の名を以て呼ぶことあり。

(以下略)

以上、佛教では凶暴な精靈や煩惱などを表象する鬼と地獄の鬼の2種類の鬼が存在し、前者はキリスト教における「daimonion」に近いものとも思われるが、佛教では修道を妨げ佛陀から遠ざけるものとして語られるのに対し、キリスト教ではキリストにより惡靈が取り除かれ結果的に人が神に近づくことが強調される。また、キリスト教で鬼の容姿が語られることは無いが、佛教においては「獄卒の頭、黃なること金の如く、眼の中より火出で、赭色の衣を着たり。手足長大にして疾く走ること風の如く、口より惡声を出して罪人を射る。」などと表現される獄鬼をはじめ、人の心に内在する煩惱を表現した鬼も有形な存在として描かれることが多い。

キリスト教における「悪魔」が人格的存在であるのに対し佛教での「悪魔」は心に内在する無形の存在であり、靈的存在として姿を持たないキリスト教の「鬼」に対して佛教の「鬼」は容姿を纏った存在であるとも言える。

5 漢訳聖書「悪魔」「鬼」

5-1 漢訳聖書における「魔鬼」「魔」－「diabolos」

漢訳聖書（4福音書）における「diabolos」に対する訳語を調査するとモリソン訳（1837）では「氏亞波羅」11例、「魔鬼」4例、「魔」1例がみられる。「氏亞波羅」は中國音では「shìyàbōluó」と読み、ギリシャ語「diabolo」の音写であったと考える。代表訳（1852）、BC訳（1859）ではすべて「魔鬼」、北京訳（1872）では「魔」と漢訳されている（表1）。

（表1）福音書における「diabolos」の漢訳

	欽定訳	モリソン訳	代表訳	BC訳	北京訳
diabolos	devil	氏亞波羅、魔鬼、魔	魔鬼	魔鬼	魔

モリソンは『華英字典』において⁽²⁵⁾

【魔】 Demons. supposed to affined human beings, a devils. 降服諸魔 to subject all devils. 天魔 certain genii. 魔鬼 a wicked super-human spirit, a devil.

と、「魔」は「人を束縛すると思われるもの」、「天魔」は「人の運命を支配する靈」、「魔鬼」を「惡意のある超自然的な靈」と述べている。また、『大漢和辞典』において「魔鬼・魔・惡魔」は次のように説明される。

【魔鬼】妖怪。ばけもの。悪魔。

【魔】①おに。人をまどはし障害をなす悪鬼。

②一事に熱中して其の本性を失ふこと。

③外道の術。錯誤を為さしめる幻法。

④仏 梵語。魔羅Maraの略。修道のさまたげをする悪鬼。

【惡魔】 囚仮道を障⁽²⁶⁾する惡神の総称。転じて、人に害をなす魔もの。

各語の第一語義をみると「魔鬼」は妖怪、「魔」は鬼、「惡魔」は仏教語であると解説されている。モリソンは仏教語である「惡魔」を退け「魔鬼・魔」を採用したと思われる。代表訳及びBC訳はモリソン訳「魔鬼・魔」から「魔鬼」を、北京訳は「魔」を選択しているが、これは次節で述べる「daimonion」の訳と関わっている。

5-2 漢訳聖書における「鬼」 – 「daimonion」

中国における「鬼」について『大漢和辞典』では死者の魂であると述べる。

①おに。②死人のたましひ。人が死ねば心思をつかさどる魂は天にのぼって神となり、形体は地に帰り、形体の主宰である魄は鬼となる。③④（略）⑤人を賊害する陰気、又は現体。もののけ。ばけもの。（以下略）

中国において「鬼」の第一語義は死者の靈である。中国の民間信仰では、死者の靈魂は冥土からの迎えの使者により泰山にある冥界の役所に連れて行かれ、そこには泰山府君と呼ばれる長官がおり、人違いでないかを検査すると考えられていた。仏教の普及とともに泰山府君は閻魔帝に変わり、冥府の部下も泰山信仰の判官に牛頭馬頭が加わるなど複雑に習合されていくが、陰府を死後の社会と考える観念を払拭するまでには至らず死者の魂魄を象徴する「鬼」の概念も民衆の間に残存したと考える。清の中期、乾隆帝の時代に奇事異聞を蒐録した『閱微草堂筆記』⁽²⁷⁾に次のような一節がある。

一鬼立前曰城隍神喚 韓念数尽当死拒亦無益乃隨去 一官署至 神檢籍曰以姓同誤矣 杖其鬼二十 使送還

ここに登場する韓を迎えにきた鬼は冥府で走り使いを務める下役人の鬼である。死者は

生前の行いにより、極楽又は地獄へ送られる者、輪廻を待つ者、冥府の役人に採用される者に4分類され、多くは輪廻を待つ間、鬼として冥府で暮すと信じられていた。前野(1971)「鬼狐の世界」によると、鬼の生活において食だけは欠くことができず、遺族の供物が入手できない場合は、他人の祭壇の供物を食べたり、靈異をおこして人々に神であると信じさせ供物にありつくと述べられており、民間では鬼は狐と並び怪異を起す魑魅魍魎の類としても浸透していた。

漢訳聖書を見てみよう。モリソン訳において「daimonion」は「鬼・鬼風・魔・魔鬼」と試訳されており、代表訳及びBC訳は「鬼・汚鬼」、北京訳は「魔・邪魔」と訳している。(表2)

(表2) 福音書における「daimonion」の漢訳

	欽定訳	モリソン訳	代表訳	BC訳	北京訳
daimonion	devil	鬼39、鬼風21、魔5、魔鬼2	鬼67	鬼66、汚鬼1	魔65、邪魔1

中国におけるキリスト教宣教活動は635年のネストリウス派による布教が最初であり、景教として唐朝時代の200年あまりの間繁栄した。この時、旧約聖書の一部と新約聖書の大部分が漢訳されたが宣教活動の禁止とともに消失した。現存する注目すべき聖書はカトリックの司祭バセによる四福音書和合の稿本「四史収偏」(1707年)である。モリソンは大英博物館に保管されたこの写本を研究し翻訳の土台としたと言われている。照応する章、節を比較するとバセ訳「daimonion」「魔」に対してモリソン訳では「鬼風・鬼」という言葉を用いている。『華英字典』によるとモリソンは

【鬼】The lower part of the character is man ; the upper part a *fiend-like head*, and Mow, *the fraudulent craftiness* of a fiend. Spirit of a dead man ; a ghost ; a demon ; a devil. Kwei, implies Reverting to ; that spiritual state of existence to which human beings return at death, Name of a star ; of a county, and of a bird ; a surname.

と、「鬼」は「死者の靈・幽靈・死後の靈的状態」と解釈している。「dimonion」の漢訳に「鬼・魔・魔鬼」を用いたのも頷ける。また、モリソンは「spirit」(靈)を「風」と漢訳したのに準じて「鬼風」という言葉を用いたと思われる。ロブシャイト『英華字典⁽²⁹⁾』においても「demon」「devil」の項に中国語「鬼」が最初に挙げられている。

代表訳及びBC訳では「daimonion」に靈の語意のある「鬼」を充て、「daimonion」を支配する「diabolos」を「魔鬼」とし、北京訳はどちらも「魔」と漢訳したことになる。北京訳は「daimonion・diabolos」を「devil」と英訳した欽定訳に倣い、代表訳とBC訳は原典を尊重して訳し分けたと言える。

6 和訳聖書「悪魔」「鬼」

6-1 和訳聖書における「悪魔」－「diabolos」

キリスト教の日本伝道は1549年に始まり、四福音書も翻訳されていたが火災で焼失したと言われている。また、1613年頃イエズス会より「新約聖書」が出版されたが現存しない。その後キリスト教の禁止に伴い聖書の和訳事業は19世紀まで待つことになるが、禁制下にあっても16世紀後半から17世紀前半にかけてはキリスト教の教義や信仰生活に関する書が翻訳されていた。新約聖書からの引用が多い『ぎやどべかどる』『コンテムツス・ムンヂ』を調査すると、「天狗」「天魔」という言葉が用いられている。『ぎやどべかどる』では「天狗」78例、「天魔」7例、「天魔波旬」1例、『コンテムツス・ムンヂ』では「天狗」12例、「天魔」1例、「天魔波旬」1例が認められ、「天狗」の用例が一番多い。『コンテムツス・ムンヂ』校注には「天狗は悪魔」と記されている。用例を確認すると、「天狗のわなに懸られ科の網に籠られ」「天狗の妨げにまけずして徳を重ね」「天魔にたぶらかされたる者」「天魔の謀畧也」等、罪への誘惑、神から人を遠ざける存在として語られている。「diabolos」に相当する言葉である。

当時のキリスト教宗教文学では翻訳の際、特別なキリスト教用語は誤解を避けるためラテン語やポルトガル語を音写して用いる場合も多く『コンテムツス・ムンヂ』では「いんへるの（地獄）・ぶるがたうりよ（煉獄）」なども原語で表現されているが、「diabolos」は「天狗・天魔」と訳出されている。カトリック宣教師達の翻訳方針が聖書の言葉を忠実に和訳することではなく、解説に重点を置いたものであったため「^{けだつ}解脱・^{こつきあき}乞食・^{けらく}快楽・^{まうねん}妄念」などの仏教語も柔軟に使用されており、「天狗」という言葉は庶民に馴染み深い言葉として採用されたと思われる。

しかし、ヘボンらは「天狗」でもなく、漢訳の「魔鬼」でもなく「悪魔」という語を選択した（表3）。

（表3）福音書における「diabolos」の和訳

	欽定訳	代表訳BC訳	ヘボン訳	分冊	全書	大正訳	口語訳	新共同訳
diabolos	devil	魔鬼	あくま	悪魔	悪魔	悪魔	悪魔	悪魔

日本において「悪魔」という言葉は「不動明王恐しや、怒れる姿に剣を持ち、策を提げ、後に火焔燃へ上るとかやな、前には悪魔寄せじとして降魔の相」⁽³¹⁾（梁塵秘抄）、「たとひ仏法わたり給へりとも、悪魔のさまたげこはくして、濁世の今にひろまり給はん事、きはめてかたし」⁽³²⁾（発心集）などと古来より仏語として用いられている。また、津田（1857）⁽³³⁾は『明六雑誌』において

魔鬼天狗等ヲ以テ呵護神トシ愚民ノ信ヲ取り（略）天竺ノ惡魔支那ノ仙人我国ノ天
狗ト略其類ヲ同ウス但仙人ハ淡泊愛スペク天狗惡魔ハ獰惡厭フベキノミ
と「魔鬼・天狗・惡魔・仙人」を同類として語っている。では、ヘボンはこれらの言葉
をどのように理解していたのであろうか。『和英語林集成』⁽³⁴⁾を確認すると、

【天狗】 (*ten no inu*) An imaginary being supposed to inhabit mountains and unfrequented places, represented in pictures, with a long nose, wings, and two claws on each foot and hands; an elf, or hobgoblin, devil. —*ni naru* to become proud or vain.

【魔鬼】 項なし

【惡魔】 A demon, devil.

とあり、「天狗」は「山や人の行ない場所に居住すると思われている、絵に描かれるよう」に、長い鼻、翼、および手足に2つの爪を持つ小妖精、あるいは小鬼、惡魔」と、キリスト教の「diabolos」とは異なる存在であると解釈し、「魔鬼」については初版から3版に至るまで立項されておらず、日本語にはない中国独自の言葉であると判断している。「diabolos」の訳語に「天狗・魔鬼」を除いたヘボンは仏語ではあるが、当時の日本において馴染みのある言葉「惡魔」を大衆の理解を優先して採択したと推測する。
なお、1889年『言海』⁽³⁵⁾にも「魔鬼」の項はなく、「惡魔」については以下のように「魔」「魔羅」と同義語であり仏教語として解説されている。

【惡魔】魔ノ條ヲ見ヨ。「—外道ノモノ」

【魔】①梵語、魔羅ノ略、其條ヲ見ヨ。②転ジテ、心ヲ乱ス靈。惡シキ神。惡魔。

【魔羅】①梵語、障礙、又、奪命ノ義、利、樂、欲、怒、惱、詐、等、凡ソ修道ノ
障リトナルモノ、下略シテ麻トノミモイヒ、隨テ、魔ノ字ヲ作ル。（以下略）

国語辞書において「惡魔」の項にキリスト教用語としての説明が加わるのは管見したところ、1896年『日本大辞典』⁽³⁶⁾以降となる。

【惡魔】①佛教を妨害する妖魔。天狗の類。②悪事を人間に為す魔神。③天使の墮落して悪性となりたるもの。（基督教）

明治後期刊行の『辞林』（1909）には「善事に障害をなす鬼類。人の心を乱す惡靈。」と「惡魔」は佛教語に特定されず、大正期の辞書において「惡魔」の解説にサタンが登場し、新たに「サタン」の項目が立てられる。しかし、「サタン」「惡魔」に仏語、基語という指定が略されることが多くなり、「惡魔」の語意に基語「サタン」のイメージが重なっていったと推測する。⁽³⁷⁾

6-2 和訳聖書における「鬼」－「daimonion」

馬場（1971）は「鬼の研究」において早期の日本文学における鬼を、①異形のもの ②形をなさぬ感覚的な存在や力 ③神と対をなす力をもつもの ④辺土異邦の人 ⑤笠に隠れて見るもの ⑥死の国へみちびく力、と概括し「鬼」字の和訓をめぐって「しだいに両者の区別は分明されてゆき、「もの」の方は明瞭な形をともなわぬ感覚的な靈の世界の呼び名に、「おに」の方は、目には見えなくても実在感のある、実体の感じられる対象にむけての呼び名にと定着してゆく」と考察している。⁽³⁸⁾

辞書による解説によると、「鬼ハ物ニ隠レテ顕ハルコトヲ欲セザル故ニ、俗ニ呼ビテ隠ト云フナリ」（『和妙類聚集』）、「神 カミ オニ タマシヒ」（『觀智院本名義抄』）と、「鬼」は隠れた存在であり「神」と同列に捉えられている。「鬼」から「神」の意が分離し兇惡なイメージが定着するには呼称の定着とともに仏教の影響によるところが大きいと思われる。『日本靈異記』では地獄の様相と中国の靈鬼が併記され、『三宝絵詞』『往生要集』などにより獄卒の印象が深まり、さらに御伽草子「一寸法師」や「桃太郎」に出てくる逞しい体格に頭角のある異様な風体の鬼が流布し、『時代別国語大辞典』室町時代編には

【鬼】①仏教でいう地獄道・餓鬼道に居り、人間の世にも恐ろしい姿で現れるという想像上の悪魔。⑦人の姿・形をしているが、角・きばがあり、恐ろしい形相をしていて、怪力があり、無慈悲で人にたたりをなすという怪物。（以下略）
と、日本における「鬼」は有形で「怖るべき形相を有し、人を悩害する怪物」という概念が定着した様子が窺える。中国において「鬼」は現在に至るまで靈を表象する存在として捉えられているが、日本における「鬼」は隠れて見えない存在からたたりをなす無形の幽鬼や異人、さらに仏教に描かれる獄卒と混同され想像上の怪物を想起させるものとなっていた。

和訳聖書を見てみよう。プロテスタントによる和訳の歴史は1837年シンガポールで出版されたギュツラフ訳『約翰福音之伝』が最初であるが、「daimonion」の翻訳について確認すると、ギュツラフは「daimonion」を「ヲニ」、ベッテルハイム訳（1855）は「おに・あくま・ゆうれい」、ゴーブル訳（1871）は「おに・あくま」と邦訳している。これらに対してヘボンは「鬼・悪鬼」という言葉を充てた。詳しくみると（表4）のようである。（数字は用例数を表す）

（表4）福音書における「daimonion」の和訳

	欽定訳	BC訳	ヘボン訳	分冊	全書	大正訳	口語訳	新共同訳
daimonion	devil	鬼	鬼34 悪鬼10	鬼33 患鬼33	鬼33 患鬼34	悪鬼66 靈2	悪靈65 靈2	汚れた靈 1

日本の「鬼」の変遷を確認すると、『觀智院本倭名類聚抄』に記されていた神と同列にあった靈的な「鬼」が人に祟りをなす存在に変化した経緯は「daimnion」にも通じるところがある。しかし、室町時代偏では仏教の影響を受けた想像上の怪物として把握されるようになり、明治期の国語辞書には古典における「無形のもの」、中国經由の「死靈」とともに仏教の影響を受けた「想像上の怪物」と説明されるようになる。

『言海』

【鬼】 (穏ノ音訛ナリト云)

- ② 幽魂ナド、無形ノモノヲ、邪祟ナドナスニ就キテイフイフ称。モノノケ、イウ
レイ、鬼
- ②人ノ形ニテ角アリ、裸体ニ虎皮ヲ絡ヒ、獰惡ニシテ怪力アリトイフ想像ノ生物ノ
名。(丑寅ノ維^{ヌミ}ヲ鬼門トイフヨリ、牛ト虎トノ形ヲ取合ハセテ描ケルナリト云)
羅刹 夜叉(以下略)

では、ヘボンは「鬼」をどのように解釈していたのか、『和英語林集成』(初版1867)から関連する言葉とともに探ってみたい。

【DEMON】 Akuma; oni; ma; akki; yasha.

【悪魔】 A demon, devil.

【鬼】 A devil, demon. Syn, MA

【魔】 A demon, evil spirit. Akuma (idem.)

【悪鬼】 (ashiki oni) Evil spirit.

【夜叉】 A demon, or devil. Syn, ONI

「demon」に対する日本語は「悪魔・鬼・魔・悪鬼・夜叉」が充てられている。「diabolos」に「悪魔」を使用したヘボンは「daimonion」に「魔・鬼・悪鬼・夜叉」から選択することになる。「鬼・悪鬼・魔・夜叉」について再版(1872)を調査すると、(下線は加筆された部分、筆者が付す)

【鬼】 A devil, demon, fiend, the spirit of one dead, a ghost; also an epithet for
a powerful or a bad man. Kokoro wo-ni suru, to harden one's heart, to force
one's self to act like a fiend. -no nembutsu.(prov.) the praying of a fiend.
Syn, MA

【悪鬼】 (ashiki oni) Evil spirit, a demon.

【魔】 A demon, evil spirit, devil. Akuma id.

【夜叉】 (A sanscrit word,) A demon. Syn, ONI

「鬼」については「死者の靈、幽靈；力強い又は悪人の形容詞」という解説が加筆され

慣用句も集められ詳細に説明されているが、『言海』などの国語辞書に掲載されている仏教的鬼については触れられておらず、「悪鬼」には「demon」、「魔」に「devil」、「夜叉」に「サンスクリット語」という解釈が加わる。悪魔に通じる「魔」と仏教用語「夜叉」を除くと、第一語義を中国での「靈」の語意と同じであると解釈した「鬼」と「悪鬼」を「daimonion」の和訳に用いたと考える。

なお、尊田（2000）が述べたように、翻訳委員会訳（分冊、全書）において「daimonion」が「悪鬼」に統一された様子はなく、ヘボン訳において採用された訳語がそのまま引き継がれたとみるのが妥当であろう（表5）。

（表5）各福音書における「鬼・悪鬼」

	マルコ伝	ヨハネ伝	マタイ伝	ルカ伝
ヘボン訳1872—	悪鬼10、鬼8	鬼7	鬼19	—
分冊1875—	悪鬼10、鬼7	鬼7	鬼18、悪鬼1	悪鬼22、鬼1
全書1880	悪鬼11、鬼7	鬼7	鬼18、悪鬼1	悪鬼22、鬼1
大正訳1917	悪鬼	悪鬼	悪鬼	悪鬼

「鬼」と「悪鬼」の使い分けについて「daimonion」の使用個所を確認すると、ベルゼブル論争、12弟子の選出、弟子の派遣、ゲラサの人を癒す場面、フェニキアの少女の信仰など9つの場面で「鬼」と「悪鬼」が用いられている。同じ場面が複数の福音書に取り上げられているが、12弟子選出の個所ではどの福音書も「鬼」と訳されているが、派遣の個所では福音書により「鬼」と「悪鬼」に訳されているなど、内容による使い分けではないらしい。

ヘボン訳から翻訳委員に引き継がれ出版された分冊においてキリスト教教義における重要な用語が多数改訳されているが、「鬼」「悪鬼」に関しては大正改訳に至るまで統一されることなく見過ごされたものと推測する。

7 おわりに

ヘボンらはマルコ伝翻訳に先駆けて、日本人補佐官による漢訳の訓読作業を行っている。訓読文は聖書和訳にとって参考にはなったが、きわめて不完全な文章であると思われ、漢訳から和訳にそのまま転用されることはなかった。語彙についてはヘボン訳で用いられた「洗礼」とバプテスマ派の支持した「^{洗礼}浸礼」を巡り結論が出ず、委員会全員の投票結果により「バプテスマ」の原語が分冊以降採用されたことは有名だが、用語の選択についても単純に漢訳の漢語に和語でルビを付しただけではなかった。しかし、「宗教語としては神道・仏教的用語および表現が多く、むしろそれらをとおしてでなければ、

宗教的表現が不可能ですらあった当時の日本において、キリスト教独自の訳語を与えることはきわめて困難な業であった」と海老澤（1989）が述べているように、新しい概念を表現するには在来語や漢訳語を用いざるを得なかった。

「daimonion」に関しては漢訳に使用された靈の意味を含む「鬼」を、日本語の「鬼」と同じ語意であると解釈した結果の採択であった。その後、『言海』以降の辞書が示すように「鬼」については仏教的要素の強い派生語意が日本に浸透定着していることから大正訳において「dimonion」はすべて「悪鬼」、口語訳において更に「惡靈」と改訳され「鬼」は聖書から姿を消すことになる。

一方、「diabolos」の訳語「悪魔」は仏教語として認識されていた言葉であるが、あらゆる階層の日本人に理解できる言葉として聖書用語に採択され、明治中期以降、キリスト教における「悪魔」の語意が辞書に加筆された。更に大正期に「サタン」が立項され、仏語と基語の区別が曖昧になり、現在では仏道を妨げる煩惱の悪魔だけではなく、尖った耳に蝙蝠のような翼を広げた所謂西洋的な悪魔の姿が連想されるようになった。仏教伝来により「鬼」の概念に変化が生じたように、明治期聖書和訳において聖書用語として採択されたことにより「悪魔」にも「鬼」と同様な遷化が起きたと考察する。

〈注記〉

- 1 小学館国語辞典編集部他2000『日本国語大辞典』小学館
- 2 高谷道男編訳1965『S,Rブラウン書簡集』日本基督教団出版部p228
- 3 尊田佐紀子2000「明治期日本語訳聖書における訳語「悪魔」について」『語文研究第91号』九州大学国語国文学会
- 4 『Interlinear Greek-English New Testament KIG JAMES VERSION』（欽定訳）1897BakerBooks／『約翰福音之伝』カール・ギュツラフ訳、『新遺詔書1-4』ロバート・モリソン訳、『新約全書』ブリッジマン・カルバートシン訳、『摩太福音書』ジョナサン・ゴーブル訳1999ゆまに書房／『四史收編』バセ訳1738大英図書館所蔵本／『新約全書』代表訳1852香港英華書院／『新約聖經』北京官話訳1902上海大美国聖經会／『新約聖書馬太伝』『新約聖書馬可伝』『新約聖書約翰伝』JCヘボン訳、『新約全書』翻訳委員社中訳1996ゆまに書房／『旧新約聖書』大正訳1973、『聖書』口語訳1954、『聖書』新共同訳2002、日本聖書協会／『新旧約全書』国語和合訳1994中国基督協会
- 5 岩隈直1996『新約ギリシャ語辞典』山本書店
- 6 A・リチャードソン他2005『キリスト教神学事典』教文館p25

- 7 馬場嘉市編1971『新聖書大辞典』キリスト新聞社／X.レオン デュフール1973『聖書思想事典』三省堂／日本基督教協議会文書事業部1968『キリスト教大事典』教文館
- 8 『聖書スタディ版 新共同訳』「キーワード」2006日本聖書協会p23
- 9 馬場嘉市編1971『新聖書大辞典』キリスト新聞社p547
- 10 古川晴風編1989『ギリシャ語辞典』大学書林
- 11 旧約聖書サムエル記「悪鬼」と和訳された個所は、ヘブル語「rūah rāāh」ギリシャ語「πνεύμα πονηρόν (pneuma poneron)」、欽定訳「evil spirit」に照応する。
- 12 日本基督教協議会文書事業部1968『キリスト教大事典』教文館p15
- 13 中村元訳1984『ブッダのことばースタニパーティー』岩波書店pp87-88
- 14 中村元1988『ゴータマ・ブッダー釈尊の生涯－原始仏教1』春秋社p125
- 15 中村元訳1987『悪魔との対話－サンユッタ・ニカーヤII－』岩波書店p304
- 16 木村省吾編1971『南伝大藏経』第十四卷第二羅陀相応大正新脩大藏經刊行会pp297-298
- 17 増谷文雄1970『原始經典 阿含經』筑摩書房p110
- 18 中村元他編2002『岩波仏教辞典第二版』岩波書店
- 19 知切光歳1978『鬼の研究』大陸書房pp160-161
- 20 『大正新脩大藏經』「第五十四卷 辞彙部下外教部全」大正一切經刊行会pp1085-1086
- 21 賴永海他注訳2003『新訳楞嚴經』三民書局 八卷pp324-325
- 22 『大正新脩大藏經 阿含經下』「長阿含經卷第七 弊宿經」大正新脩大藏經刊行会 p45
- 23 塚本善隆編1974『望月仏教大辞典』世界聖典刊行協会
- 24 石田瑞麿校注1974『源信』日本思想大系6 岩波書店 p17
- 25 羅布存德原1884『華英字典』藤本次右衛門
- 26 諸橋轍次郎編1959『大漢和辞典』大修館
- 27 紀昀1800『閱微草堂筆記』「如是我聞」卷四 上海古籍出版社p223、
- 28 前野直彰1971「鬼狐の世界」『中国古典文学大系 第42卷』平凡社pp518-525
- 29 R・モリソン1996『英華字典』(ゆまに書房) では次のように解説する。

【DEMON】鬼、魔鬼、邪神、鬼怪、妖精、汚神、悪鬼

【DEVIL】An evil spirit or being, 鬼、魔鬼、悪鬼、邪鬼

- 30 新村出他校註1973「コンテムツス・ムンチ」『吉利支丹文学集上』朝日新聞社p220
- 31 『梁塵秘抄 閑吟集 狂言歌謡』1993新古典古典文学大系 岩波書店p81

- 32 『方丈記 発心集』新潮日本古典集成1976新潮社p382
- 33 津田真道1875「天狗説」『明六雑誌』14号1976立体社
- 34 飛田良文他編2000『ヘボン著和英語林集成初版再版三版』港の人
- 35 大槻文彦編2004『言海』ちくま学芸文庫
- 36 大和田建樹編1896『日本大辞典』博文館
- 37 金澤庄三郎編1909『辞林』三省堂、『新文学辞典』(1918)において「サタン」は
「悪魔、悪鬼等と訳す」と解釈され『現代日用新語辞典』(1920)はこの解説を引き継
いでいる。『文芸大辞典』(1928)には基督教では・・と解説されるが、基語の指定は
ない。
- 38 馬場あき子1995『馬場あき子全集第四卷』三一書房pp24-29、p34
- 39 天理図書館善本叢書法1976『観智院本類聚名義抄』下p295／京都大学文学部国語学
国文学研究室編1999「箋注倭名類聚抄」『諸本集成倭名類聚抄』臨川書店
- 40 土井忠生他編1985『時代別国語大辞典 室町時代偏』三省堂
- 41 海老澤有道1989『日本の聖書』講談社学術文庫p219